資料

職業選択に及ぼす親の職業的影響

——小・中学校教師・大学教師・建築設計士について——

田 中 宏 二* 小 川 一 夫**

THE INFLUENCE OF PARENTAL OCCUPATION ON CHILDREN'S CAREER CHOICE :

—The Cases of School Teachers, College Professors, and Architects—

Koji TANAKA AND Kazuo OGAWA

The purpose of the present study was to analyze the influence of father's occupation on career choices of their children in connection with children's inheritance of their father's occupation. The subjects were children whose father's occupation has long been either school teacher (n=267), or college professor (n=363), or architect (n=153). The main results were as follows. 1) Compared with the ratios of eldest children choosing any of the three occupations mentioned above other than the father's, those entering the same as their father's were significantly high. 2) As for the environmental models as in Holland's theory, the relationships existing between father and son together with father and daughter, was related to his hypothesis. 3) Using the quantification method II as a method of determinant analysis in the process of occupational inheritance, parental expectation and identification, the age of a child and its educational background was found to contribute largely to decide upon its occupational inheritance.

Key words: career choices, occupational inheritance, teachers, architects, Holland's theory

問 題

職業構造の変化や社会の開放化に伴い、子供の職業選択に及ぼす親の職業的影響は低下の一途をたどっている(富永, 1979)。しかし、親と子の生活のかかわりがある限り、親から子へ世代を通じた伝達があり、親の職業的影響は子供の職業選択を基本的に規定し続けることが予想される。ただ、親の職業的影響は捉え難く微妙である(Super, 1957)だけに、その影響を究明するためには、広い視点をもつ必要がある。

まず、職業継承性の比較的高い職業に注目して研究を進めたいと考える。先行研究(小川・田中, 1979)では、

*大分医科大学 (Oita Medical University)

**広島大学 (Hiroshima University)

広範な職業種の継承性の検討の中で、とくに専門的職業の高い継承志向を確認している。

第2の視点は、研究対象とする標本特性を考慮にいくることである。職業的社会化は、一般に当該職における経年に伴って深まることが明らかにされている(Adler & Aranya, 1984)。特定の職業に長年従事してきた親を対象にしてこそ、内面化された親の職業的世界が子弟の職業選択に反映されると考える。また、親を対象とすることにより、子弟の職業選択に対する親自身の態度を調べることができる。従来、子供の認知による研究が多いだけに、これは重要なことである。

第3の視点は、親の職業と子供の職業選択の関係を同一職業間での直接的な継承性だけでなく、ある種の関連ある職業への選択傾向として分析することである。この

点で、Holland(1973)の職業選択理論が、子供の職業選択傾向を職業類型の面から捉える視点を与えてくれる。彼は仮説として、1)多くの人びとは、現実型、研究型、芸術型、社会型、企業型、慣習型の6タイプの人格型のいずれかに分類される、2)人びとが生活し、仕事をしている職業環境には、人格型に対応した6種類のモデル的な職業環境(人格型と同じ呼称)がある、3)人は自分の人格型に調和した職業環境を求め、それを維持する傾向がある、4)子供の人格型の発達は、主として親によって促進され、しかも親に類似した人格型が発達しやすい、等をあげている。この仮説が妥当であるならば、親と子は類似の職業環境を求めることが予想される。

第4の視点は、親の職業と子供の職業選択の間には種類の媒介変数が多重的に影響することが予想されるので、多変量解析法による影響過程の分析を行うことである。

以上を考慮して、われわれは小・中学校教師、大学教師、建築設計士の専門職をとりあげ、長年その職に従事してきた親を調査の対象とする。

小・中学校教師の供給源については古くから多くの研究があり、比較的高い継承率(10%台)が認められている。

大学教師については、これまで専門職の社会移動の問題として社会学の分野で扱われている(たとえば新堀・有本, 1969)が、心理学的な研究は極めて少ない。この20年間に大学教師が5万人から12万6千人へ倍増していることや、現代大学生の最も志向する職業の1つである(館他, 1984)ことなどを考えれば、大学教師の職業心理学的研究の意義は深い。

また、建築技師はわが国の技師人口中に占める割合が土木技師について高く、18万人を擁する代表的な技術的専門職である。個々の職業として建築技師を取りあげた研究はその例が殆どないだけに興味ある対象である。建築技師は仕事の性格として、芸術的側面(計画、意匠など)と工学的側面(構造、施工など)を併せもつユニー

クな職業である。とくに、前者を主業務とする建築技師は建築設計士と呼ばれている。

本研究は、小・中学校教師、大学教師及び建築設計士の職業に長年就いてきた親を対象として、親の職業が子弟の職業選択にどのような影響を及ぼすかの問題を、子弟が親と同じ職に就く、いわゆる職業継承性の観点から究明するものである。

方 法

調査対象と手続 小・中学校教師の抽出は、広島県、愛媛県及び大分県下で昭和57年度末に定年退職に準ずる形で退職を迎えた、推定年齢55歳以上の男教師595名を対象とした。調査時期は、昭和58年11月から12月の間であった。

大学教師では、日本教育学会(昭和54年度会員数2,462名)または日本心理学会(昭和57年度会員数4,200名)に所属する、推定年齢55歳以上の大学教師963名(教育学442名、心理学521名)を対象とした。調査時期は、昭和58年3月から4月の間であった。

建築設計士では、日本建築家協会(昭和57年度会員数1,162名)に所属する、推定年齢53歳以上の建築設計士416名を対象とした。調査時期は、昭和58年9月から10月の間であった。

調査は郵送調査法(無記名)で行われ、回答数は小・中学校教師では361通(回収率60.7%)、大学教師では教育学248通、心理学321通の計569通(回収率59.1%)、建築設計士では232通(回収率55.8%)であった。

分析には、父親の資料で子弟が存在し、かつ子弟(長子)が職業に就いているものを用いた(TABLE 1)。

調査内容 選択肢方式と自由記述方式を併用した質問紙法に基づき、その内容は3つに分けられる。1)親自身に関するもの:職業上の専門分野(あるいは担当教科)、職業経歴(年齢尺度上に職業経歴を記述)、当該職への再就職意欲(人生をもう1度やり直すことができるならばどんな職に就きたいか)、職業興味検査(Hollandの開発

した Vocational Preference Inventory を翻訳したもので、6尺度各14項目からなる。ただし大学教師には実施していない)など、2)子弟に関するもの(親の認知による):第1子から第4子までの子弟について、子弟の学歴、専攻、選択職業及び仕事内容(自由記述)など、3)親子間に関するもの:親の職業的期待(子弟の高校2・3年頃、親が子弟に対してどんな職業を希望または期待していたか)、親の指導様式(①子

TABLE 1 分析対象

父親の職業	父親 N(平均年齢)	息子					娘				
		1人 兄弟	2人 兄弟	3人 兄弟	4人 兄弟	計	1人 姉妹	2人 姉妹	3人 姉妹	4人 姉妹	計
小・中学校教師	267 (58.0)	122	96	21	3	242	46	16	4	0	66
大学教師	363 (65.0)	162	118	21	3	304	87	43	14	0	144
建築設計士	153 (63.0)	60	40	20	2	122	25	18	6	0	49

(注) 兄弟(姉妹)人数は混性構成によらないで単性構成で区分した。

弟に対して期待を抱き積極的に働きかけたか一親主導、あるいは子供の自主性を尊重したか一子主導、②子弟に対して親と同じような生き方を望んだか一親同一化、あるいは親とは異なった生き方を望んだか一親異質化、③子弟の職業選択にあたっての具体的な配慮を4段階尺度で問う、子弟の選択職業に対する親の満足感（4段階尺度）など、計22項目からなる調査票を用いた。

結 果

職業選択行動

職業継承性 父親の職業及び子弟の性によって程度に違いはあるが、長子についてみると父親と同じ職業を子弟が選択する割合（継承率）は、父親の職業とは異なる職業として当該職を子弟が選択する割合に比べて高い（TABLE 2, TABLE 3）。とくに息子の場合、選択した職業種類の中で父親と同じ職業を選んだものが最も多く、父親の職業と息子の継承選択（小・中学校教師、大学教師、建築設計士、その他の職業の4カテゴリー）の間には高い関連がある（Cramér 連関係数 $V=.46$, $\chi^2=283.3$, $df=6$, $P<.01$ ）。

父親の職業的性質をより細かく分析してみるならば、小・中学校教師の場合、小学校教師（入職後一貫して当該教師）の息子では小・中学校教師継承率28%、中学校教師（一貫して当該教師）の息子では小・中学校教師継承率14%を示し、親の所属する校種と息子の継承の有無との間に弱い関連が認められる（ $V=.17$, $\chi^2=4.31$, $df=1$, $P<.05$ ）。大学教師の場合、専門分野（教育学と心理学）による継承率及び選択傾向に違いは認められない。建築設計士の場合、親の専門分野（計画系と構造系）が計画系（102名）の息子では建築技師継承率46%を示し、そのうち息子の専門分野は計画系85%、構造系15%であり、他方、親が構造系（20名）の息子では建築技師継承率40%

%を示し、そのうち計画系50%、構造系50%である。親の専門分野と息子の継承選択分野の間に弱い関連が認められる（ $V=.25$, $\chi^2=3.30$, $df=1$, $P<.10$, Yates の修正）。

出生順位 1人兄弟長男、2人兄弟長男、2人兄弟次男の3者について継承率の比較を行ったところ、いずれの親の職業においても出生順位と継承性の関連は高くない（小・中学校教師 $V=.17$, 大学教師 $V=.10$, 建築設計士 $V=.20$ ）。娘の場合は息子に比べ出生順位との関連は一層小さい。

親の職業的期待と実現 親が必ずしも具体的な期待職業をあげなかった割合が、息子では16%—31%、娘では15%—37%存在するけれども、何らかの具体的な期待を表明した場合には、いずれの親の職業においても親と類似の職業を含めての広義の継承期待をあげる親が最も多い。小・中学校教師（親）の教育職（教師と教育職）期待率は息子38.4%、娘53.0%、大学教師（親）の教育・研究職（教師、教育職、研究職）期待率は息子33.9%、娘40.3%、建築設計士（親）の建築技師期待率は息子39.3%、娘14.3%である。

広義の継承期待をうけた子弟が実際にそれらの期待職に就く割合（期待実現率）は、小・中学校教師の息子37.6%、娘77.1%、大学教師の息子44.7%、娘51.7%、建築設計士の息子70.8%、娘42.9%を示し、かなり高い割合で継承期待が実現している。

職業選択傾向と Holland 類型

父親の職業と子弟の選択職業を、Holland 類型の職業コード（Holland, 1978）に基づいてそれぞれ6つの職業環境型に分類した。まず親の職業では、小学校教師は社会型（S）、理数系中学校教師及び大学教師は研究型（I）、建築設計士は芸術型（A）の各環境型に分類され、同様に子弟の選択した職業も6つの環境型に分類される。父親と子弟の環境型の関連をみると（TABLE 4）、息子、娘共に

TABLE 2 父親の職業と息子（全長男）の職業

父親の職業	息子の職業 N	小・中・高 教 師	大 学 教 師	建 築 技 師	営業系 会社員	工業系 技 師	研究員・ 研究技師	事務系 会社員	管理系 会社員	事務系 公務員	記者・ 編集者	銀行員	医師・ 歯科医	その他 の職業
小・中学校教師	242(100.0)	50(20.7)	3(1.2)	5(2.1)	47(19.4)	23(9.5)	15(6.2)	13(5.4)	7(2.9)	19(7.9)	3(1.2)	12(5.0)	9(3.7)	36(14.9)
大 学 教 師	304(100.0)	31(10.2)	45(14.8)	2(0.7)	44(14.5)	31(10.2)	33(10.5)	27(8.9)	18(5.9)	12(3.9)	12(3.9)	10(3.3)	9(3.0)	30(9.9)
建 築 設 計 士	122(100.0)	0(—)	2(1.6)	55(45.1)	13(10.7)	15(12.3)	5(4.1)	6(4.9)	6(4.9)	3(2.5)	3(2.5)	3(2.5)	1(0.8)	10(8.2)

TABLE 3 父親の職業と娘（全長女）の職業

父親の職業	娘の職業 N	幼・小・中・ 高 教 師	大 学 教 師	建 築 技 師	事務系 会社員	デザイナー ・芸術家	個 人 教 師	事務系 公務員	社会福祉 専門職員	医師・ 薬剤師	その他 の職業
小・中学校教師	66(100.0)	38(57.6)	1(1.5)	0(—)	5(7.6)	2(3.0)	2(3.0)	2(3.0)	3(4.5)	5(7.6)	8(12.1)
大 学 教 師	144(100.0)	50(34.7)	8(5.6)	2(1.4)	27(18.8)	3(2.1)	13(9.0)	12(8.3)	6(4.2)	7(4.9)	16(11.1)
建 築 設 計 士	49(100.0)	8(16.3)	1(2.0)	5(10.2)	12(24.5)	8(16.3)	1(2.0)	2(4.1)	0(—)	0(—)	12(24.5)

TABLE 4 父親と子弟（全長子）の職業環境型の関連 上段：息子
下段：娘

父親の環境型	子弟の環境型 N	現実型 (R)	研究型 (I)	芸術型 (A)	社会型 (S)	企業型 (E)	慣習型 (C)	連関度と検定
小学校教師 (S)	60(100.0)	3(5.0)	15(25.0)	6(10.0)	14(23.3)	13(21.7)	9(15.0)	$\chi^2 = 129.34 \quad df = 10$ $p < .01$
理数中学校教師(I)	37(100.0)	4(10.8)	16(43.2)	0(—)	3(8.1)	8(21.6)	6(16.2)	
大学教師(I)	304(100.0)	4(1.3)	131(43.1)	30(9.9)	31(10.2)	75(24.7)	33(10.9)	
建築設計士(A)	122(100.0)	1(0.8)	23(18.9)	62(50.8)	3(2.5)	25(20.5)	8(6.6)	
小学校教師 (S)	22(100.0)	1(4.5)	1(4.5)	3(13.6)	13(59.1)	0(—)	4(18.2)	$\chi^2 = 29.84 \quad df = 6$ $p < .01$
大学教師(I)	144(100.0)	0(—)	25(17.4)	34(23.6)	47(32.6)	6(4.2)	32(22.2)	
建築設計士(A)	49(100.0)	0(—)	2(4.1)	22(44.9)	5(10.2)	5(10.2)	15(30.6)	

(注1) 小・中学校教師は一貫型教師でかつ人数20以上の資料のみ扱う。

(注2) 娘資料の χ^2 検定では子弟のR, E型を少数例なので0型に合併して行う。

概して親と同一の環境型に就いている割合が高く、両者に積極的な関連が認められる。すなわち、親の環境型が社会型の子弟では小学校教師、社会科教師、社会福祉職員など社会型の職に多く就き、研究型の子弟では理数系教師、機械技師、薬剤士など研究型の職業に、芸術型の子弟では建築技師、新聞記者、デザイナーなど芸術型の職業に多く就いている。これらの結果は、親と子の環境型の類似性を示唆した Holland 仮説を支持している。

職業継承性の規定因

小・中学校教師と建築設計士の両者に共通な10の説明変数を取りあげ、子弟が継承するか否かの判別にそれら諸変数がどの程度の影響を及ぼしているかについて、数量化理論Ⅱ類を適用して検討を行った(TABLE 5)。

継承行動の判別に対する要因寄与の大きさの基準には、偏相関係数を用いその順位を示した。各カテゴリーに付されたカテゴリーウエイト(数値)の意味は、プラスの方向のものは継承選択の方向に働き、マイナスの方向のものは非継承選択の方向に働くことを示す。

判別に寄与する要因の軽重は、小・中学校教師と建築設計士で互いによく似ており、両職業の偏相関係数の相関は有意に高い($r_s = .86, P < .01$)。寄与の高い要因は、親側の要因では指導様式2と職業的期待、子弟側の要因では年齢と学歴である。それぞれのカテゴリーウエイトの意味は、前者では親と同じような生き方を願う態度(親同一化)や親と同じ職に就くことを期待する態度(継承期待)が、継承選択に働くことを示している。後者では職業によってその意味が異なっており、小・中学校教師の子弟では若年齢層で学部卒が、建築設計士の子弟では中年年齢層で大学院修了が、それぞれ継承選択に働くことを示している。なお、年齢要因の働き方に関して疑念が

生じるが、その検討は考察の項で行う。とりあげた10変数を用いて、全標本を継承選択と非継承選択に2分類する際の判別成功率は、小・中学校教師77%、建築設計士80%の値を示した。

考 察

職業継承性

先の調査(小川・田中, 1979, 1980)では、青年の選択希望による職業継承志向を明らかにしたが、本報告では成人の選択行動(実際に職に就いている)による職業継承性の存在を示すことができた。とくに、小・中学校教師及び建築設計士の子弟では高い継承率が見出され、本報告が専門的職業に焦点をあて、さらにその職に長年従事してきた親を対象としたことは有効であったと思われる。

職業継承の強さは、同じ専門職であっても個々の職業により、あるいは性によりかなりの違いが認められた。この現象を解釈するにあたり、Gottfredson (1981)の職業認知の枠組みは示唆的である。彼女は青年の職業認知の要素に、性型(男性一女性)、職業威信水準、職業分野(Holland 類型)の3要素をあげ、前2者を量化した職業認知図を提示している。本結果をその認知図に対応させて考察すると、小・中学校教師では、女性度の高い職業(性度6)であることが娘の継承率を高め、建築設計士では、男性度の高い職業(性度2)であることが息子の継承率を高める原因になっていると思われる。大学教師の場合、性型では中間的(性度4)であり、性型よりは職業威信水準の高さ(他の2職業が60点台に比べ大学教師の70点台)が、入職の難度に関連し、男女共に継承率を低めていると考えられる。このように職業間あるいは男女間の継承率の違いを解明するには、社会経済的、

TABLE 5 職業継承規定因の分析（数量化Ⅱ類による分析結果）

アイテム	カテゴリー	小・中学校教師 (相関比 $\eta = .484$ (判別成功率=77.1%))			建築設計士 (相関比 $\eta = .676$ (判別成功率=80.0%))		
		サンプル数 (n=240)	カテゴリー ウエイト	偏相関係数 (その順位)	サンプル数 (n=120)	カテゴリー ウエイト	偏相関係数 (その順位)
親の年齢	1 1～59	154	—3	.02	41	39	.21
	2 60～64	86	5	(9)	22	—12	(5)
	3 65～69	—	—	—	25	—14	—
	4 70～	—	—	—	35	—29	—
親の職業的期待	1 継承期待あり	21	64	.14	48	35	.29
	2 準継承期待あり	71	30	(4)	20	—69	(3)
	3 継承期待なし	148	—24	—	52	—6	—
親の指導様式(1)	1 親主導	54	23	.06	24	38	.15
	2 子主導	186	—7	(8)	96	—10	(8)
親の指導様式(2)	1 親同一化	115	42	.18	57	39	.33
	2 中間	16	1	(2)	15	18	(2)
	3 親異質化	109	—44	—	48	—52	—
親の指導様式(3)	1 配慮あり	125	22	.11	56	23	.17
	2 配慮なし	115	—24	(6)	64	—20	(7)
親の職業 人格類型	1 現実型 (R)	38	—12	—	9	—53	—
	2 研究型 (I)	54	24	.12	38	17	.18
	3 芸術型 (A)	28	2	(5)	43	8	(6)
	4 社会型 (S)	78	7	—	—	—	—
	5 企業型 (E)	9	—57	—	—	—	—
	6 慣習型 (C)	8	18	—	—	—	—
	7 その他	25	—45	—	30 ^(注1)	—18	—
親の当該職への 再就職意欲	1 あり	136	0	.00	55	3	.07
	2 なし	87	1	(10)	46	4	(10)
	3 わからない	17	—1	—	19	—19	—
祖父の職業	1 当該職	18	—58	.09	20	32	.14
	2 当該関連職	17	4	(7)	9	—30	(9)
	3 その他の職業	205	5	—	91	—4	—
息子の年齢	1 1～29	86	68	.27	39	—64	.33
	2 30～34	115	—34	(1)	35	35	(1)
	3 35～39	39	—51	—	21	47	—
	4 40～	—	—	—	25	13	—
息子の学歴	1 高校	15	—59	.17	5	—24	.22
	2 短大・高専	9	—106	(3)	6	—74	(4)
	3 大学	193	15	—	86	—5	—
	4 大学院	23	—47	—	23	43	—

(注1) カテゴリーS及びEのサンプルは各々3と1の少数なので便宜的に「その他」のカテゴリーに合併させた。

(注2) 判別変量の群別平均値(SD)……教師：継承者94(82)、非継承者—25(89)

…設計士：継承者73(74)、非継承者—62(73)

文化的（性役割）な観点からの分析も重要である。

職業選択傾向と Holland 理論

大学教師（息子）や建築設計士（娘）の場合、職業継承率がいずれも10%台と低かったにもかかわらず、職業

環境型の一致率では40%台に高まるなど、Holland 仮説に立脚した視点は、親の職業的影響の微妙さを捉えるのに有効であった。また、本結果は親の職業と男女大学生の希望職業の関連を、同様の手続き（職業環境型の対応）

によって分析した Grandy & Stahmann (1974) 及び DeWinne *et al.* (1978) の結果と一致するものであった。

現代の建築技師養成の多くは、工学分野で行われているが、建築技師の職業的な源流は芸術職であった。この文脈で調査した Carmon & Mannheime (1979) は、建築学専攻の学生の自己イメージが、芸術家への同一化と技師への同一化とに分かれることを見出している。手続きも異なるが、本結果において建築設計士の子弟(男女共)の約半数が芸術型の職業に就き、さらに息子の多くは芸術色の濃い計画系建築技術であることは大変興味深い。

職業継承性の規定因

子供に対する親の職業的態度が、継承性の重要な規定因であることを改めて確認することができたが、他方で息子の年齢要因がそれと同程度の寄与を示したので、その点について若干の検討を加えてみたい。年齢要因は、小・中学校教師では若年齢が継承選択に働き、建築設計士では若年齢が非継承選択に働いたが、この要因は年齢自体の性質を示すよりは、むしろその時代性を反映するものと考えられる。つまり小・中学校教師の若年齢子弟は最近10年間の教職志望人気の高まった時期にあたり、建築設計士の若年齢子弟は同期間の建築業界の不況期にあたることを考慮にいと、年齢は時代性の代替指標であると解するのが妥当と思われる。

したがって、社会経済情勢を反映すると思われる年齢要因を除去した場合においても、他の要因による影響度や働き方に変動が認められないならば、取りあげた要因が時代を越えて継承性を規定する要因であると想定できる。この仮定を検討するために、小・中学校教師の子弟で29歳以下の若年齢者のみを全標本から抽出し、同様の分析を行った。その結果、要因寄与の順位は全標本の場合とほぼ同じ傾向 ($r_s = .75$, $P < .05$) を示し、継承性の判別成功率(83%)も同じ程度であり、これら諸要因の継承性規定因としての一般性を確認することができた。

以上の検討から、本報告において得られた主な結果は次の通りである。1) 父親と同じ職業を子弟が選択する割合は、小・中学校教師、大学教師及び建築設計士においてかなり高いことが認められた。2) 親と子の職業環境の間に有意な関連が認められ、親の職業的影響が子弟の同一類型職への選択傾向となって現われた。3) 職業継承性の規定因として、親の職業的態度、子弟の年齢及び学歴が重要であることが示された。

引用文献

Adler, S., & Aranya, N. 1984 A comparison of the work needs, attitudes, and preferences of pro-

fessional accountants at different career stages. *Journal of Vocational Behavior*, 25, 45-57.

Carmon, N., & Mannheime, B. F. 1979 Reference groups and professional self-image: The case of architects. *Journal of Vocational Behavior*, 14, 169-180.

DeWinne, R. F., Overton, T. D., & Schneider, L. J. 1978 Types produce types-especially fathers. *Journal of Vocational Behavior*, 12, 140-144.

Gottfredson, L. S. 1981 Circumscription and compromise: A developmental theory of occupational aspirations. *Journal of Counseling Psychology Monograph*, 28, 545-579.

Grandy, T. G., & Stahmann, R. F. 1974 Types produce types: An examination of personality development using Holland's theory. *Journal of Vocational Behavior*, 5, 231-239.

Holland, J. L. 1973 *Making vocational choices: A theory of careers*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.

Holland, J. L. 1978 *The occupations finder*. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologist Press.

小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.

小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331.

新堀通也・有本章 1969 大学教授の経歴型の国際比較 社会学評論, 13, 2-21.

スーパード・E. 日本職業指導学会(訳) 1960 職業生活の心理学 誠信書房(Super, D. E. 1957 *The psychology of careers*. New York: Harper & Row.)

館曉夫・松本真作・渡辺美枝子・松本純平 1984 現代大学生に見る職業志向性の側面 雇用職業研究, No. 21, 29-38.

富永健一(編) 1979 日本の階層構造 東京大学出版会

〈謝辞〉 本調査にご協力頂いた、小学校・中学校退職教諭、日本教育学会、日本心理学会並びに日本建築家協会の会員の皆さんに心から感謝いたします。

〈付記〉 本資料の数量化理論Ⅱ類の解析には、九州大学大型計算機センターを利用した。

(1985年1月21日受稿)